

空手部

設立	1958年10月11日 (道場落成日)
部長	榊原 研互(商学部)
現在の部員数	23名(うち理工学部生2名)
OB/OG 会代表者	高橋 祐直(電気19期)
OB/OG 会会員数	107名

工学部で空手部としての活動を始めたのは1956年で、空手道場が完成した1958年10月をもって空手部が正式発足した。その後、1972年4月に工学部が矢上に移転し、空手部の運営・活動が慶應義塾体育会空手部に一本化されることになったので、工学部空手部としての歴史は、実際にはこの14～16年間のこととなる。

工学部空手部の発足

1956年当時、工学部は日吉での教養課程が1年間で、翌年2年生になると小金井に移り専門課程に進むため、授業終了後に稽古のために小金井から三田や日吉の体育会空手部道場まで行くのは非常に困難だった。こうした状況の中で、福島彦幸(応化11期)、田中清一郎(機械14期・応化17期)のように、困難を越えて体育会空手部で実績を残した工学部生も、ごく少数ではあるがいた。

慶應義塾には大学だけでなく、高校にも空手部があり、当時も今も放課後に日吉の空手道場で高校生部員が大学生部員と一緒に稽古をしている。1956年からは、塾高校時代に空手部で鍛えられながら工学部に進学した者が数多く2年生になって小金井に進級したため、小金井キャンパスの中で



1959年春、新入部員勧誘演武 中島慎介



1958年、道場骨組み 左より高橋祐直、清水正一郎、中島慎介、田中清一郎

空手の稽古ができるような環境作りの気運が高まった。工学部に空手部が正式に発足したのは、道場落成の年、1958年のことだった。

設立に関わったのは前述の田中清一郎、太田欽士(現姓松永、機械17期)、中島慎介(機械18期)、清水正一郎(計測18期)、高橋祐直(電気19期)等塾高校時代から空手にいそしんだ者が中心だった。

部発足に際して、機械工学科の笠原英司助教授(当時・後に教授)に部長就任をお願いし、快諾を得た。同教授(2010年没)は型破りの活動的な方で、空手部長としてその後の部の発展と問題解決にいつも力を貸してくれた。

空手道場の建設

工学部空手部としての活動を開始して以来、部員の数が増え、学年毎の部員数が5～10人となり稽古場所の確保に悩まされ、1957年頃より小金井の学校敷地内の空手道場建設に真剣に取り組み始めた。学校許可と多額の費用を要することだったので、我々学生部員の手には余ったが、笠



1960年12月、18～20期部員が笠原英司空手部部長を囲んで



1961年秋体育祭。「空手部」看板は小幡師範揮毫。看板右手に当時の主将・山本一雄(電気20期)、左手に副将・鍛原民治

原部長と三田の空手部諸先輩の絶大な支援で、翌1958年10月には念願の空手道場を小金井キャンパス敷地内に完成させることができた。

笠原部長は学内に道場用敷地を確保し、三田空手会諸先輩、特に伊藤俊太郎(経済・1940年卒、「月刊空手道」2011年6月・7月号特集記事で「塾空手部の不世出の天才空手人」として取り上げられる)は軽量鉄骨一式、野崎豊男(経済・1943年卒)は屋根及び外装一式のカラー鉄板を寄付し、真下欽一(経済・1955年卒)にも多大な骨折りをいただいて、15坪の空手道場を完工させることができた。この道場の建設にあたっては、清水正一郎が部内で実行委員長を担当したが、忙しい工学部の学業の合間を縫って、早期建設を目指して学校側と交渉したり、手分けして三田空手会諸先輩を訪問したりと、努力が実を結び、10月に完成記念として道場開き式典を行うことができた。

工学部空手部としての最盛期

1958年10月の道場完成以来、部活動は年々充実して部員数が増え、1960年～1964年の5年間は部員在籍数の最盛期にあたり、総部員数は26名～31名を数えた。道場にはいつも10名前後の部員がいて毎日2時間前後稽古に汗を流した。慶應義塾体育会空手部(三田)のOB組織である三田空手会からは、伊藤光男(政治・1946年卒)や望月康彦(政治・1954年卒、後の三田空手会会長)ら諸先輩が会社勤務後に道場に寄って指導したり、夏



1963年当時の道場内での稽古風景

合宿には高木房次郎(経済・1943年卒)他諸先輩が指導にあたった。

進級昇段審査

進級昇段審査には日吉の蝮谷道場まで部員全員が足を運び、技量の高い体育会空手部員とともに、小幡功師範(経済・1929年卒)他審査員を前に主に各種の形の演武を行い、技量の審査を受けた。

合宿

夏合宿は、道場完成後は部員数も増えてきたため、体育会空手部とは別に独立して行っていたが、ときには山中湖畔での体育会空手部員との厳しい合同合宿が行われた。

対外試合

工学部部員の中から体育会空手部選手の一員として初めて各大学との対外試合に出場した鍛原民治(電気20期)は1961年春と秋にそれぞれ、

日大、早稲田等との対抗戦に出場。和田陽一(応化 26 期)も 1966 年から 1967 年にかけて、立教、早稲田との対抗戦と全日本学生空手選手権(個人戦)に出場し、対抗戦はすべて勝利した。

また和田は慶應空手部内の試合では三田杯【組手個人戦】や優勝杯【形個人戦】でそれぞれ優勝するなど、彼ら 2 人は体育会空手部選手に伍して立派な活躍をした。

三田・日吉との交流

三田・日吉との交流には、前述の昇級昇段審査や合宿の他に、工学部空手部主催の「70 キロ強歩」があった。このときばかりは工学部空手部の出番で、下調べや当日の采配をすべて行った。

厳寒の夜中 10 時に奥多摩を出発し、途中何回か小休止を取るものの終夜歩き通しで、翌日昼頃ようやく小金井道場に到着するという行程だった。12 時間強歩いて道場に着くと、グラウンドでは汁粉や豚汁を用意した留守番担当が参加者を出迎え、冷えて疲れた体と飢えを癒し、日吉、三田、小金井の懇親を深めた。

以上のように、1958 年 10 月から 1972 年 4 月に矢上へ移転するまでの 14 年間、小金井で卒業した学生 85 名が小金井の空手道場を中心に空手に親しみ、同道場に愛着を持っていた。

矢上移転後

工学部が 1972 年 4 月に矢上へ移転後は、前述の通り部の運営は「体育会空手部」に一本化されたので、「工学部空手部」という(理)工学部としての組織は発展的に解消し、理工学部生で空手の道を志す者は個々に「体育会空手部」に入部して活動することになった。

31 期(1973 年卒)が矢上一期生となるが、部員は 1 名で、その後も毎年の入部者は 0 名から 1 名という状況(35 期のみ 2 名)で、学業事情や学生意識の変化により、理工学部学生の空手部加入者は大幅に減ったが、入部者は小金井時代同様充実した活動をしてきた。

人数の点では、小金井時代の 14 年間に 86 人の部員在籍に対し、矢上に移ってからの 40 年間は



現役学生の稽古風景。手前左は池田夏一、右は伊東那由多で、いずれも理工学部 2 年

21 人と、在籍部員数は大変少ないが、そのような状況下でも理工学部の空手部員の存在は、体育会空手部の中で大きな役割を果たしている。

河野伸二郎(機械 35 期)は 1975 年の関東大会に 3 年生で大将として出場し、チームをベスト 8 に導いた。さらに翌年には主将となり、関東大会個人戦でベスト 16 まで健闘。近藤久(電気 36 期)は副将を務め、工藤琢也(数理 55 期)は主将として、関東大会個人戦でベスト 8 に入賞。翌年の小林史明(電気 56 期)も主将として、関東体重別個人戦ベスト 8、全日本団体戦、関東大会団体戦、東日本団体戦では部員を率いていずれもベスト 16 に入るなど目覚ましい活躍をした。

さらにその後、稲垣次亮(管理 60 期)も主将の重責を担うなど、理工学部の学生は体育会空手部員として重要な役割を果たしてきており、2013 年現在 2 名の理工学部生が活躍している。前出の小林は OB となって体育会空手部のヘッドコーチを



1960 年夏合宿。1961～63 年卒部員たち。中央は当時の主将・高橋祐直

務めており、河野伸二郎(機械 35 期)は現在大学のチームドクターとして貢献している。

40 期(1982 年卒)～71 期(2013 年卒)
合計 13 名

在籍部員数の推移

工学部空手部の卒業年次別在籍部員数(空手部正式発足前含む)の推移を以下に示す。

- ・空手部正式発足前
 - 11 期(1953 年卒)～15 期
 - 合計 4 名
- ・空手部正式発足後(矢上台移転前)
 - 17 期(1959 年卒) 8 名
 - 18 期 5 名
 - 19 期 10 名
 - 20 期 11 名
 - 21 期 6 名
 - 22 期 14 名
 - 23 期 7 名
 - 24 期 2 名
 - 25 期 2 名
 - 26 期 6 名
 - 27 期 3 名
 - 28 期 5 名
 - 29 期 4 名
 - 30 期(1972 年卒) 3 名
 - 合計 86 名
- ・矢上台移転後
 - 31 期(1973 年卒)～39 期(1981 年卒)
 - 合計 8 名

OB 会の活動

三田空手会員として、とくに工学部 OB の会費徴収や連絡を中心に、福島彦幸(評議員)、高橋祐直(評議員)、鍛原民治(評議員)、和田陽一(現任理事、2007 年 4 月より幼稚舎、2008 年 4 月より普通部コーチ兼務)などがその任にあたっている。

また工学部 OB 会組織として、小金井空手会がある。高橋祐直会長の下、鍛原民治、山本保晴(管理 22 期)、和田陽一等が世話役となり、毎年秋に 20 名前後の工学部 OB が集って相互の健康を確認し合いながら旧交を温めているが、毎回歴代の三田空手会会長他幹部数名の参加をいただき、小金井空手会は三田空手会の一員との認識と連帯感を深めている。

写真は、2009 年 11 月 6 日、恒例の五反田の秋田郷土料理店「吾作」で開催された懇親会で、三田空手会からは奈蔵宣久会長(経済・1965 年卒)と岩本明義先輩(経済・1951 年卒)が参加した。

補遺

2013 年 7 月に塾監局で旧小金井キャンパスの建物図面を閲覧した。偶然、空手部道場を建てたときの、東京都北多摩地方事務所印のある「確認通知書」を発見した。校舎や実験室、学生ホールなどの増築に関してさまざまな確認通知書に目を通したが、用途に「空手道場」と課外活動が明示された書類は、前にも後にもこれだけである(編集事務局)。



2009 年 11 月、小金井空手会懇親会。前列左から三田空手会奈蔵宣久会長、福島彦幸、三田空手会岩本明義、小金井空手会高橋祐直会長、田中清一郎

6. 敷地の位置	イ、地名地番 東京都小金井市 794 番地 ロ、用途地域 (住居)商業、準工業、工業、指定なし ハ、防火地域 防火、準防火、指定なし		ニ、その他の区域 法 22 條適用地域 空地率 指定なし
7. 主要用途	学 校		8. 工事種別 新築、(増築) 改築、移転、用途変更、大規模の修繕、大規模の模様替
9. 敷地面積	14,826.250 坪	坪	敷地面積との比
10. 建築面積	16,000 ㎡	3,660.660 ㎡	法 55 條 2%
11. 延べ面積	16,000 ㎡	4,097.910 ㎡	法 50 條 20%
13. 工事着手予定日	昭和 年 月 日		14. 工事完了予定日 昭和 年 月 日
15. 其他必要事項	前面確認 22.12.19 22.12.26 22.12.26 22.12.26 22.12.26 22.12.26 22.12.26		
16. 用途	空手道場		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所
申請種別	増 築		申請者 北多摩地方事務所

空手部道場建設時の確認通知書 (部分)